

「城を歩く会」4月定例会「加曾利貝塚とお成り街道*バス研修会」

徳川家康と土井利勝、「御成り街道」を歩く

平成30年4月11日 山岸弘明

きょうの主要行程

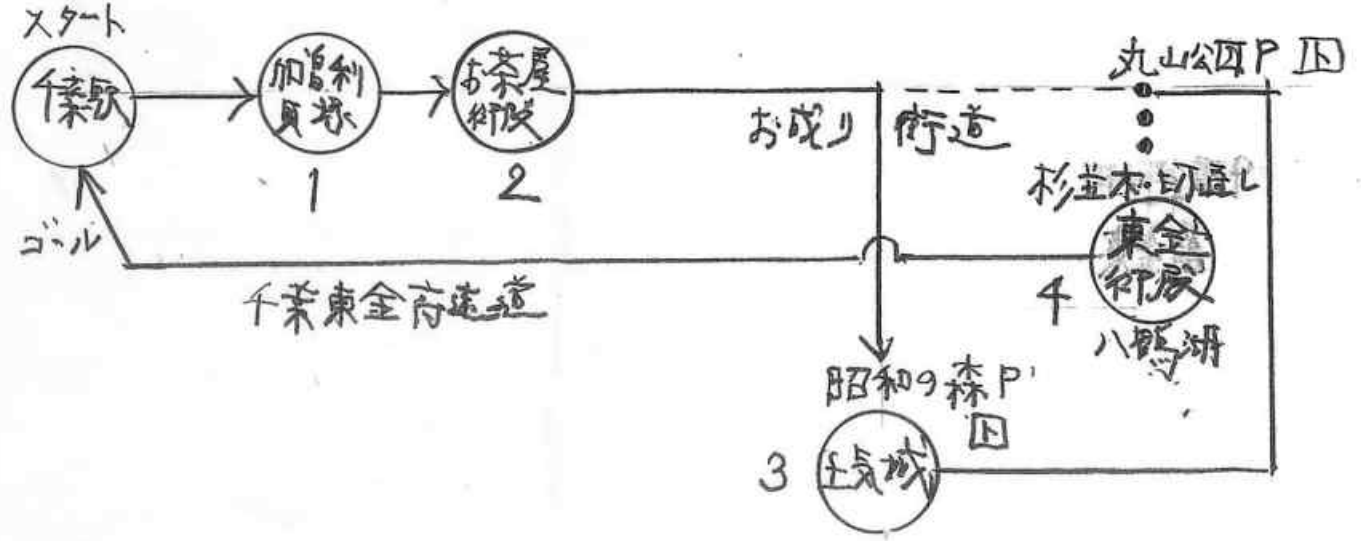
- 9時30分 千葉駅中央口集合、配車
- 10時00分 出発
- 10時30分～12時00分 加曾利貝塚（保科担当＝必ずトイレ）
移動（昼食は各自随時）
- 12時40分～13時00分 御茶屋御殿（山岸担当＝トイレはありません）
移動（御成り街道）（13時40分ころ昭和の森駐車場トイレ）
- 14時00分～15時10分 土気城（石井担当＝トイレはありません）
移動（昭和の森駐車場または東金丸山公園トイレ）
- 16時00分～17時10分 御成り街道切り通し、八鶴湖、東金御殿（山岸担当＝トイレ）
移動（東金駅前乗車、千葉東金高速道）
- 18時00分 千葉駅中央口到着、解散

今回はテストケースとして、地元の「市原中央観光バス」をチャーターしました

当面のスケジュール（詳細は「会報号外」を参照ください）

- 5月定例会（11日金曜日）4つの江戸城外郭御門を歩く
- 6月定例会（8日金曜日＝変更あり注意）小石川後樂園、水道博物館ほか
- 7月は休会
- 8月定例会（上旬＝会場抽選待ち） 夏季研修会

今日の案内コース



鷹狩り＝飼いならしたタカで狩猟すること。中国から伝来、平安時代からさかんになる。鷹狩りは「軍事教練」の場でもあった。本来女人禁制のはずの「東金鷹狩り」に家康は側室ら20人以上の女性を同行させた。随行者は数百人でときに数千人に及んだこともあった。家康の狙いはツル。宿敵・豊臣家を滅亡させた直後、元和元年11月の鷹狩りは7泊8日で、射止めたツルは112羽に達した。「天下人」となった家康にとっての「鷹狩り」はリクレーション。楽しみ的一方、戦闘訓練に、権力誇示に、情報収集の場として活用した。



土井利勝は家康の落胤か～謎多い出自

- ①寛政重修緒家譜（幕府編纂の武家名鑑）＝父土井利昌、母葉佐田則勝の女。天正元年遠江国浜松に生まれる。ときに東照宮（家康）より相州広正のご短刀を賜う。いとけなきより傍らに候し、7年4月7日、台徳院（秀忠）誕生の時、付属せられ、りん米240俵を賜う。ときに7才。
- ②寛政呈譜（寛政譜の編纂にあたり土井家が提出した元原稿）＝東照宮遠州浜松居城の節、御殿において出生、時に相州広正の短刀を拝領。（中略）母は葉佐田美作守則勝の女。東照宮お側に給仕、利勝出生ののち小左衛門利昌に賜う。ゆえに利勝は利昌の家に養育された。
- ③古河市、同市史編纂委員会の各資料＝利勝は家康の子であったと断定して誤りない。江戸時代から利勝の「家康落胤説」は根強く、幕府も容認したといわれる。家康の落胤だとすれば、利勝が家康、秀忠、家光3代にわたる絶大な信頼とその功績がよく理解できる。
- ④土井利勝の通説＝幼きより家康に仕え、天正7年秀忠誕生に際して付属させられる。慶長5年の上杉景勝討伐に従い、上田城を攻めて諸軍を指揮する。7年1万石、10年従五位下、大炊頭、15年加増されて佐倉城3万石で老中となる。しばしば江戸と駿府を往復して家康の駿府政権と江戸の秀忠政権をつなぐ役割を果たし、このころすべての政務を参与した。慶長19年、20年の「大坂の陣」は利勝軍が活躍して6万5千石、寛永2年の秀忠、家光上洛に供奉して14万石に加増された。同9年秀忠没後も家光に仕え、翌年領地を佐倉から古河に移して16万石に加増された。同15年大老に就任し、家光の補佐役として將軍教育を行なった。明敏で智略に富む性格で重用され、青山忠俊、酒井忠世とともに「寛永の三輔」と称された。

家康、秀忠、家光3将軍の「房総方面鷹狩り」関連記録

- ① 慶長16年10月15日＝ 家康、稲毛あたりで鷹狩り（徳川実記）
- ② " 18年12月3日＝ " 稲毛あたりで鷹狩り（徳川実記）
- " 12月6日＝ " 明年上総土気、東金狩りを予告（徳川実記）
- " 12月12日＝ " 来正月土気、東金の地に新鷹を捉飼する到命あり
- " 12月＝ 利勝、家康の命を受けて御成り街道、船橋・千葉茶屋・東金御成り御殿着工

慶長19年1月、利勝が突貫工事で進めた船橋から東金狩り場へ通じる専用道路「お成り街道」と宿泊施設「御成り御殿」が完成。この結果、家康の命令次第、いつでも狩りに供奉し、自領（佐倉）に家康を迎えることができるようになった

- ③ 慶長19年1月8～16日＝ 家康、東金渡御、13日は佐倉あたり狩り（徳川実記）
- " 11月＝ " 臼井来訪、権現水伝説（印旛郡史）

元和元年、家康、「大坂の陣」で宿敵豊臣家を滅ぼす

- ④ 元和元年11月16～23日ころ＝ " 東金渡御、狩り（徳川実記）
- ⑤ " 11月17～23日＝ 秀忠、17日佐倉渡御、狩り（徳川実記）
- ⑥ " 12月4～6日＝ 家康、稲毛あたり狩り（徳川実記）

元和2年4月、家康駿府城で逝去

- ⑦ 元和3年11月＝ 秀忠、東金渡御、狩り（徳川実記）
 - ⑧ " 4年10月29～11月12日＝ " 東金渡御、狩り（徳川実記）
 - ⑨ " 5年11月21～12月5日＝ " 東金渡御、狩り（徳川実記）
 - ⑩ " 6年9月16日＝ 家光、東金渡御、狩り（徳川実記）
 - ⑪ " 7年11月20～12月3日＝ 秀忠、東金渡御、狩り（徳川実記）
 - ⑫ " 9年10月13日＝ " 東金渡御、狩り（徳川実記）
- 寛永元年1月＝ 小栗信友、東金離れ館、土気茶亭工事開始（徳川実記）

- ⑬ " 2年12月6～8日＝ 秀忠、東金渡御、狩り（徳川実記）
- ⑭ " 4年11月12～12月3日＝ " 東金渡御、狩り（徳川実記）
- ⑮ " 5年11月＝ " 岩留村に別館造営、渡御
- ⑯ " 7年11月8～12月3日＝ " 東金渡御、狩り（寛政譜）
- " 9年12月＝ 東金放鷹、のちまたこのことあり

寛永9年、秀忠江戸城西の丸において逝去

寛永10年、土井利勝は佐倉城から古河城16万石に栄進、大老として重きをなした。

正保元年没。当時長生きの72歳であった。

利勝の古河転封以降、東金御殿に将軍が再び足を踏み入れることはなかった。

- ① 家康の東金渡御は合計4回（うち長期滞在2回）、秀忠は10回（長期滞在7回）、家光1回。頻りに家康、秀忠が往訪した。その多くに至近距離の佐倉城を本拠とし、絶大な信頼を寄せた利勝が随行したものと考えられる。
- ② 家康は東金、佐倉周辺で狩りを楽しみながら安房里見氏や千葉、原、酒井といった旧小田原北条領外様国衆たちの動きや風聞に耳を傾けたものといえる。

御茶屋御殿から東金御殿へ～御成り街道をゆく

1) 船橋から一直線に東金をめざす～御成り街道

- ① 船橋から千葉をへて東金に結ぶ直線道路を「御成り街道」という。その距離はよそ37km、慶長18年12月12日徳川家康が鷹狩りのため佐倉城主であった土井利勝に街道作りを命じ、翌1月7日に完成、工期は年末年始をはさんだわずか25日間、領内96か村の領民を動員し、夜間も提灯の明かりを頼りに工事を進めたという、文字通りの突貫工事であった。
- ② 家康は慶長19年1月7日江戸城を発って、青戸、千葉に宿泊、東金に7日間泊まって18日に江戸へ戻った。この年11月「大坂冬の陣」が起り、こえて同20年4月、「夏の陣」で宿敵・豊臣氏を滅亡させて「後顧の憂い」を絶つと、年号を元和と改めた同じ年11月再び東金に8日間滞在して鷹狩りに興じた。
- ③ 家康は生涯を通じて鷹狩りを楽しみ、関東8か国に休息、宿泊のためのお成り御殿を21か所も作った。昨年秋案内の鴻巣御殿もその一つである。
- ④ 「御成り街道」の出発点は船橋御殿であった。JR総武線船橋駅から徒歩7、8分、船橋本町4丁目の小さな社が最初の休泊施設・船橋御殿跡地の一部で、現在「船橋東照宮」が建っている。当時、後出「茶屋御殿」と同じ方1町（100m角）の方形館で家康が休んだ。
- ⑤ 御成り街道は御殿側の船橋大神宮下で成田街道から分岐する。船橋大神宮は「延喜式神名帳」にもみられる古社で、古くから船舶の航路目標として明治22年に灯明台が築かれた。JRの線路をくぐると津田沼になる。後は何しろ一直線、かつてたんぼ畑と牧野が連なった田園地帯をまっすぐにお成り街道が走る。千城台をすぎたあたりから急に道幅がせまくなって上り下りが険しくなる。ゆかりの神社や名刹、旧家のたたずまいが続くが大型バスは通れない。
- ⑥ 千葉市教育委員会「御成り街道」史跡看板（茶屋御殿およそ1km手前、御成り街道の雰囲気伝える旧道、大宮神社、旧名主宅前に所在）
御成り街道は船橋御殿から東金御殿までの10里15町（約37km）道幅3間（約5.5m）のほぼ一直線の道路で、慶長18年（1613）徳川家康が東金への鷹狩りを第一の目的に、佐倉藩主土井利勝に命じ造らせたものである。家康の命令を受けた利勝は沿線96か村の名主を招集して村ごとに工事区間を分担させて昼夜兼行で造ったので別名「一夜街道」とか「提灯街道」と呼ばれている。街道沿線には、ここ大宮神社から船橋方向へ約500mのところ、工事を見通すために造った提灯塚や、ここから東金方向へ約300mの左側の奥まった所に金光院という正応2年（1289）に創建したと伝える薬師如来を本尊とする真言宗豊山派の名刹があり、家康が東金への鷹狩りの際に立ち寄ったと伝えられている。金光院から東金方向へさらに700m行ったところに將軍家の宿泊所兼休息所に使用した御茶屋御殿跡がある。



集合の千葉駅
← 中丸口



御成り街道



金光院



→ 加曾利貝塚



→ 石井家長屋
（立寄りません）

2) 東金への中間休息地～御茶屋御殿 (千葉市史跡)

①その名も御殿町、御成り街道から100mほど入った所に「御茶屋御殿跡」がある。深さ5mの空堀と高さ3mの土塁を巡らせた110m四方の単郭で、南北に虎口を設けている。中世の方形館に御殿建築の基本スタイルを取り入れている。内部構造は將軍の御殿空間と家臣の空間を分離させているが、休息施設的な色合いが濃いとされている。

②千葉市教育委員会「御茶屋御殿跡」史跡看板

徳川家康が東金への鷹狩りのために休息所として造営したものです。このような御殿は千葉氏のほかに御成り街道の起点である船橋に「船橋御殿」お狩り場である東金には「東金御殿」が設営されましたが寛文年間に取り払われて、その跡地も現在大きく改変されています。この御茶屋御殿も同じころ取り払われたものと考えられますが、跡地は良く旧態をとどめています。

御殿跡は一辺約110mの方形で、周囲に幅約5mの薬研堀の空堀と約2.5mの土塁をめぐらし、南北2か所に入出口があって、その内側に枡形土塁が構築されていました。内部の遺構については発掘調査により、主殿と思われる基壇部分のほか、長大な掘っ立て柱建物跡群や井戸のほか17世紀中葉の遺物も発見されています。

3) のろしで線引き～一直線の御成り街道を行く

①バスは5kmほどの1直線道「御成り街道」を進む。

工事の時、船橋大神宮と東金台方で「のろし」を上げて線引きをし、昼間はその線上の太木に白旗をかかげ、夜は提灯をともして昼夜兼行で工事を進めたという。およそ1里、見通しのよい高台を「一里塚」と呼んだといい、焼塚、椎の古木、くぬぎ山、殿山など一里塚の地名が残っている。

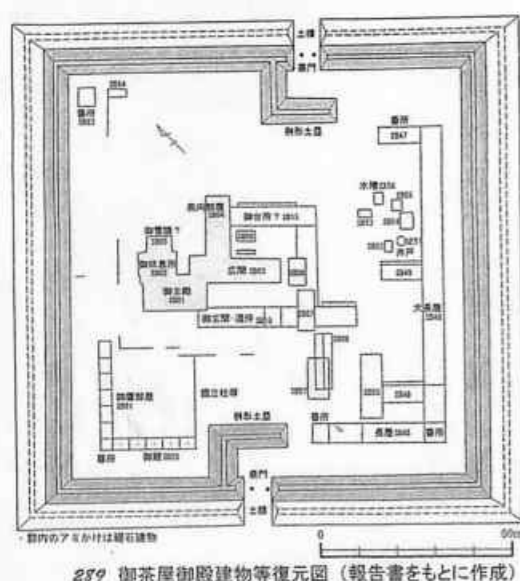
②左手に千葉県酪農農業組合牧場

右手に袖が浦カントリークラブ

③このあたりから道が左にカーブ。鍋島農場の区画整理で道路が変わったのだという。

お成り街道旧道はあとかたもなく消された。

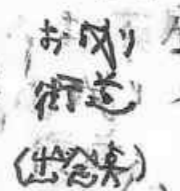
④落花生の町・八街市に入って「沖十字路」で御成り街道ともいったんお別れ、次の見学地「土気城」をめざす。



お茶屋御殿跡



空堀と土塁



お成り街道 (出発点)



(昨平家内) 御茶屋御殿跡

船橋御殿跡



家康、秀忠鷹狩りの本拠～東金御殿はいま学び舎に

1) ロマンの日吉神社杉並木と息をのむ大切通し

①土気城から再び御成り街道へ。丸山公園で降車。

②日吉神社

③樹齢4百年のみごとな杉並木参道。家康の命で植林されたものという。昼なお暗い原生林が幽玄の世界にいざなう。

④御成り街道を締めくくる東金城切通し。東金には鎌倉を彷彿させる切通しが多い。日吉神社参道と八鶴湖を結ぶ切通しは家康も実際に通った。むき出しの岩肌が両壁にそびえて続く。上りは苦難の坂だが今日は下り、足もとしっかりと、事故のないように降りる。

⑤家康の東金御殿もこの切通しが万一の防御線となった。

2) 御殿庭池の八鶴湖と家康手植えみかんの本漸寺

①切通しを抜けると「八鶴湖」に出る。東金御殿の庭池として築かれたが、いまは桜名所としてにぎわう。早咲きの今年、名残りの花見が楽しめるかどうか。

②東金市観光協会「八鶴湖」看板

その昔、やつ地という。(中略)慶長18年、家康公、東金御殿を造営されるにその御殿前池として弁天島などを設け整備される。面積は約1万1千坪(36300㎡)、周囲10町(1km)

②本漸寺=創建不詳。元曹洞宗の寺院で上総10か寺の一つという。戦国時代東金城主酒井氏に属して法華宗に改宗、現在は単立、家康「お手植えのみかん」が伝わる。

3) 標高70mの断層崖に立地する東金酒井氏の本拠～東金城跡

①東金城は県立東金高校と本漸寺の裏山一帯、標高70mの断層崖の頂にある。東は断崖、南から東面は急斜面で、天然の要害。酒井氏は始め千葉支族、のち小田原北条氏の他国衆として独立した。天正18年、豊臣秀吉の小田原征伐で北条氏に与したが敗れて改易された。

②東金城跡碑、史跡御殿山碑

③東金御殿は東金城の根小屋で酒井氏居館跡が考えられる。

④東金市教育委員会「東金城址」史跡看板

東西約700m、南北約500mの規模をもつ、半独立丘陵の山城。東金酒井氏の本城として天正18年(1590)まで機能していたことが確実である。本城の初見は、「鎌倉大草紙」によると、享徳の乱の初期、美濃より下向した東常縁の家臣浜春利が拠ったとされることである。昭和63年に行われた発掘では15世紀末～16世紀前半ころとされる瀬戸美濃系のすり鉢の断片が出土している。標高74mの最頂部に主郭を置き、西側に一段低い細長い第2郭を配する。比較的緩傾斜の北側斜面には腰曲輪と支尾根の堀切り、段差などを設け防御している。



大通カ9切通し



八鶴湖



東金城本丸(舟形堀)

4) 史跡看板絵図に偲ぶ～東金御殿

- ①御成り街道の終点は東金御殿跡。建物は寛文年間に取り壊され、跡地に千葉県立東金高校が建っているの、立ち入って往時を偲ぶことはできない。教育委員会の「史跡看板」が1枚。描かれた絵図面が当時の様子を伝える。遺構や遺物が少ないのは残念だが、残された記録や伝承が、400年の昔家康がたしかにここ東金高校の地で、濃密な日々を過ごしたことを裏付けている。
- ②御殿の一部が隣町大網白里町に移築され現存。また市内本竜寺山門は御殿の構造材を使用したとされるが、改変が激しく確認は困難だという。
- ③東金市教育委員会「東金御殿」史跡看板
東金御殿は徳川家康による「鷹狩り」の命を受けた佐倉城主土井利勝が慶長19年から翌年にかけて東金代官島田次兵右衛尉重次以栢を造営にあたらせました。この御殿は船橋一東金間に造られた御成り街道の通過点にあり、東金道で「鷹狩り」を行なう將軍（大御所）の宿泊施設でした。現在、県立東金高等学校が建てられています。
東金城のあった城山の東麓の敷地（約6,700㎡）には玄関、広間、坊主部屋、小姓部屋、書院、鉄砲部屋、弓部屋、老中部屋、台所 所などの部屋、別棟には鷹部屋、長屋、馬屋、大番所などが建てられました。ほぼ中央に家康専用の部屋があったといわれていますが、家康の所在を明確にしない事情もあり、絵図には記されていません。また、小池の拡張工事も行われ、谷池（御殿前池＝八鶴池）と上池に分けたといわれています。
寛永7年（1630）大御所・秀忠の御成りを最後に東金が鷹狩りは行われなくなり、その後、寛文11年に東金が幕府直轄地（天領）から福島の板倉藩領となり、御殿は取りこわされその一部が小西の正法寺（現在大網白里町）などに移されたとのこと。右絵図と下絵図の大きな違いは「表御門」と「御裏門」が逆転していることです。元禄4年の記載がある下絵図の方が当時の状況に近いことから右絵図は江戸時代後期に～明治時代初期と判断されますが、時の経過とともに御殿の役割も変わったことが窺えます。
- ④東金駅でバス乗車。千葉東金高速道で解散地点の千葉駅へ。

以上



東金御殿跡 史跡看板



本瀬寺

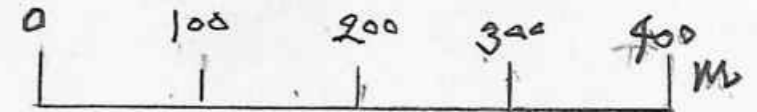


土気城跡



切り通し

杉並木



東金御殿周辺案内コース (1.5km)

戦国酒井氏の土気城

千葉市東端標高90mの台地に造られた。古城跡を長亨(ちやうきやう)2年(1488)酒井定隆が改修したと伝わる。

天正18年(1599年)豊臣秀吉の房総攻めの際に破れ廃城となった。城の中核となる部分は、現在日本航空航空研修センターから老人ホームひまわりの郷に変わり部分的な改修をされたが戦国時代の城郭の形態を良く残されている。

土気城の伝承

土気城は平安時代に鎮守府将軍であった、大野東人が東北地方の蝦夷に対する軍事的拠点の一つとして築いたものと伝えられている。

鎌倉時代に入り千葉氏の一族相馬胤綱の次子、土気太郎が土気の荘の地頭に任じられ居住した。戦国時代畠山重康の居城となるが、下総中野城にいた酒井定(貞)隆の勢力におされこの地を撤退する。長亨2年(1488)中野城主であった酒井定隆が土気古城跡を改修して入城し以後、5代100年間にわたって酒井氏の居城として上総の地に君臨した。※(鎮守とは兵士を駐在させて、その地を鎮め守ること。)

千葉県教育委員会資料

酒井氏

酒井氏の前身は浜氏の苗名の地「浜の村」は、浜氏の一族で、酒井氏の祖といわれる。「酒井清伝」がいたといわれる。大檀那(おほだんな)として文明13年(1481年)に鎌倉本興寺本堂を建立を行っている。

ただし下総国浜の村に浜春利の下向以前から浜氏の一族が居住し、浜春利の東金入城を期に勢力を拡大し、やがて土気へ進出したものと考えられる。

以上の諸説あるが浜の村の浜氏は酒井(清伝)といわれるのが有力とされる。

(浜の村は現在の千葉市浜野) 千葉県城郭資料

酒井氏上総・下総に領地拡大

古河公方足利政氏の子、足利義明が下総の小弓公方足利義明成立後に酒井氏は足利氏に仕え、足利義明は安房里見氏の支援を受けて下総を拡大していったが、北条氏綱が足利足利義明を滅ぼした後に酒井氏は北条氏に仕えた。「小弓公方足利義明(千葉市生実)」

永祿8年2月(1565年)北条氏政・原氏以下の軍に攻められ里見方の酒井胤治は破れ北条氏の支配地となった。永祿11年12月武田信玄と今川氏、戦の今川氏加勢のため北条氏は駿河に侵攻したが、静岡県由比・薩垂峠でにらみ合いの中、酒井氏は千葉氏・原氏、上総の境目の領地を攻め、土気・東金を拠点として自立していった。

酒井氏は土気城の支城として大椎城を16世紀後半に築いたとされる(上総)市原市内の押沼・瀬又・高田・中野・永吉・犬成・有木・西広付近まで攻めて拡大していった。

天正2年6月(1574年)に北条氏政・氏照は関宿城(築田氏)を攻め取り拠点とした。古河公方の本佐倉城千葉胤富・臼井城の原胤継の居城は北条氏に攻め取られ北条氏は下総に領地を拡大していった。安房の里見氏と北条氏の抗争が続くなかで、酒井氏は状況に応じ離反したり、北条氏についてを繰り返していた。

(第2次国府台合戦)

天正3年8月(1575年)に北条氏政は下総国の原氏などと共に下総府中から侵攻を開始し佐倉から土気城を攻めて、天正4年8月酒井氏は土気城と東金城は壊滅的打撃をうけて完全に支配下に組み込まれた。

土気城の遺構

千葉市東端の大網街道を大網へ向う高地に土気城が造られた。当時の城下に入ると虎口が幾重に造られた標高60m~70mの台地に土気城跡が残されている。千葉県内の丘陵地帯に造られた城は外堀がなく城内の空堀での攻撃を守っている、遺構が見られる。

大手口を入ると三角馬出しと言われる所は、現在も馬出しの痕跡が残っている。馬出しと3の丸入り口に空堀と土塁の痕跡が残っている。

Ⅲ郭(3の丸)に入ると右側に貴船大明神がまつられ、道祖神と貴船大明神2ヶ所に伝承の説明板が設置されている。周囲は畑で東西180m南北250mの平地である。

Ⅱ郭内(2の丸)に二重空堀と二重土塁・内升形虎口が造られている。以前は日本航空航空研修センターであったが、その後ひまわりの郷老人ホームに売却された。Ⅱ郭の周囲切岸の発掘調査で標高60m位の台地に造られたという。現在は樹木が繁茂し確認できない。御蔵前曲輪西側の谷(田圃)を超えた位置に井土沢曲輪が細長い形で造られと伝わる。

Ⅱ郭内(2の丸)玄関前広場は御蔵前曲輪で、周囲を高い土塁で造られている。建物の場所は善勝寺曲輪でテニスは元、太鼓谷・(家)であった。善勝寺曲輪の一段高い位置に本丸が造られ現在は記念碑が本丸内に立てられている。

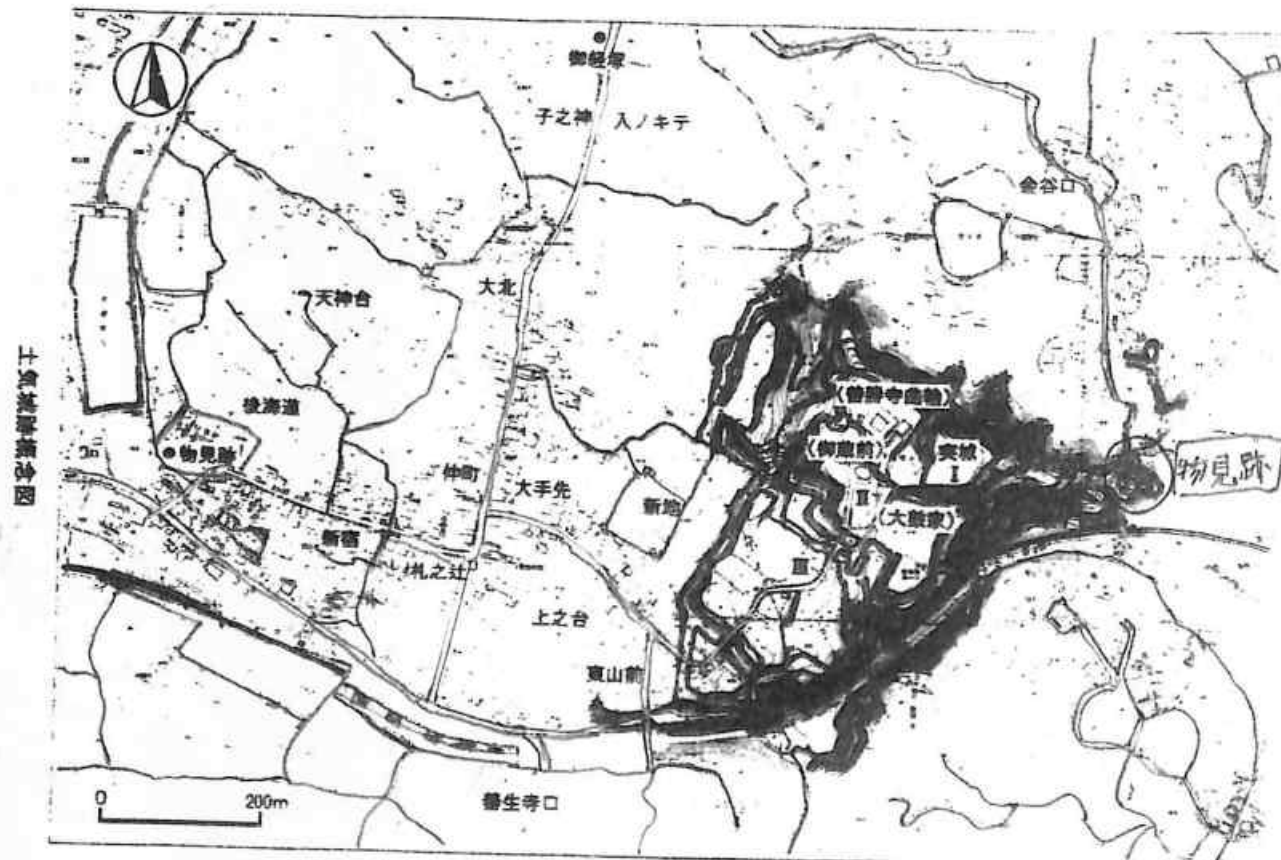
御蔵前曲輪東側の道を金谷口に下って行くと大堀切が造られ、更に進と先端部左側90mの高い位置と、大網街道から城下入り口左側の高所2ヶ所に物見台が造られた。

城内から金谷口集落に(根小屋)がつくられていたと思われる。大堀切が造られたのは、小田原攻めを意識して北条氏から各支城の改修の指示で行われた。

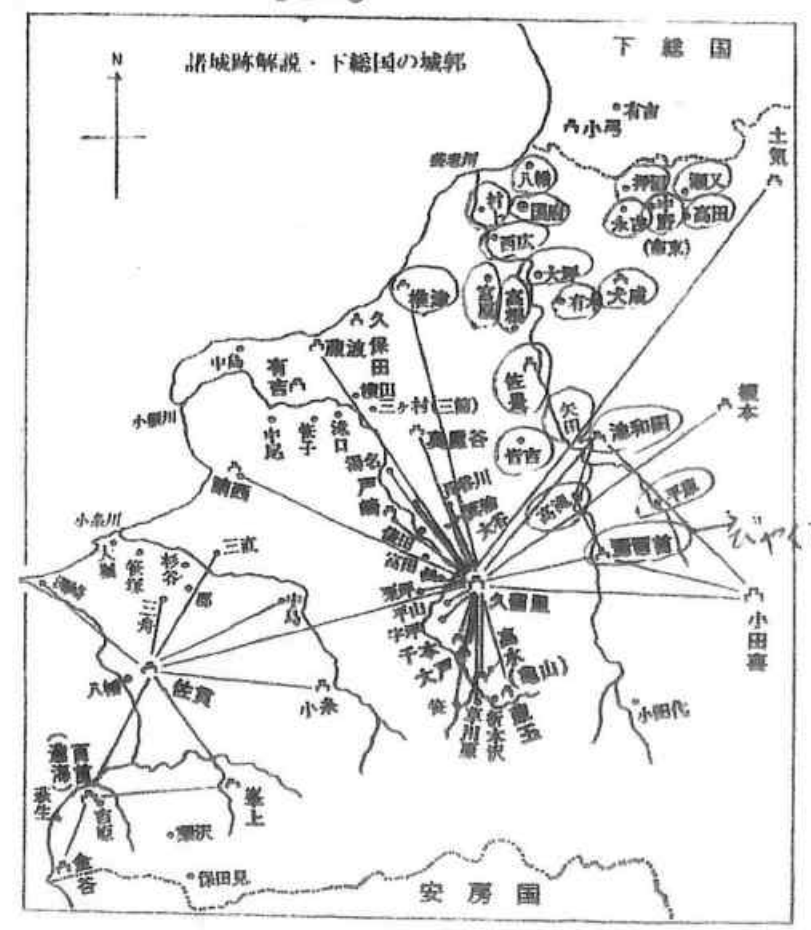
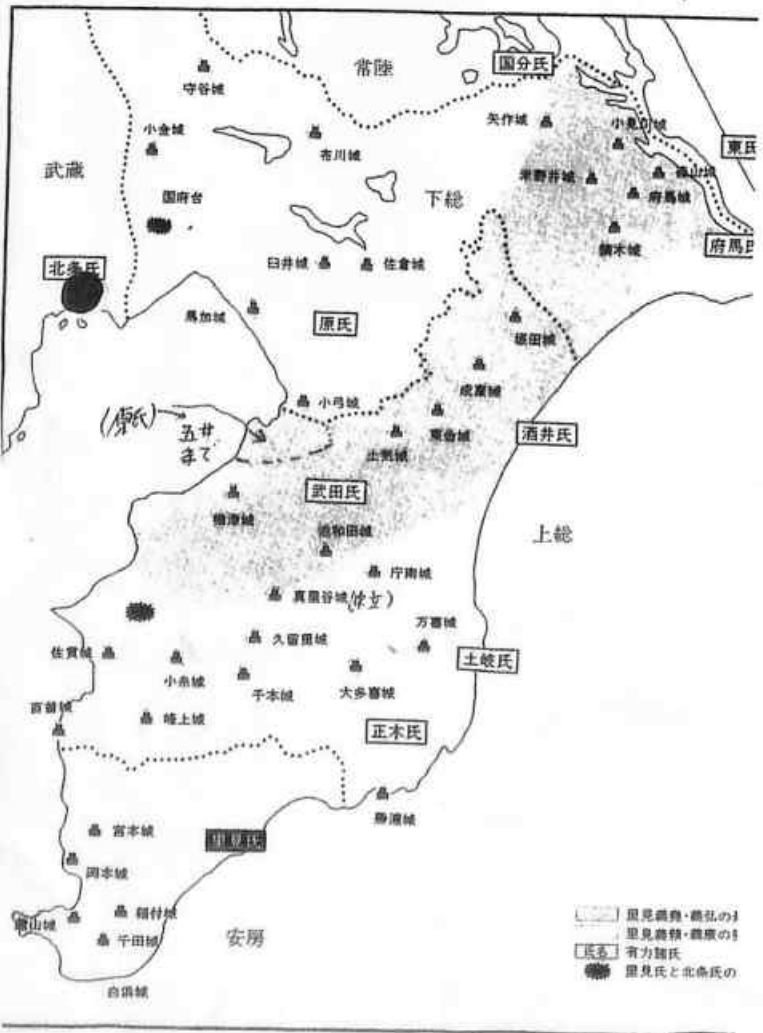
土気城の防禦は下総の国からの攻撃に対して造られた城で、上総国は里見氏の支配地であるために大手口は平地で籠城戦には不向きな地形である。

小田原攻め

「関東八州諸城覚書」には「とけの城 同 左衛門佐 三百キ」とあり、その戦力のおおよそが知れる。豊臣秀吉の小田原攻めで籠城し北条氏が降伏すると酒井氏も降伏し、土気城も豊臣側接種され廃城になつた。(条氏の千葉の支城の軍勢を調査していた。)



第三圖 黒見氏の久留里領關係圖と家臣団分布



(3)



本紙古帳之儀者東都二合半坂
酒井長重郎様御二〇〇〇二付享保二年二上ル

天正二甲戌年

五月吉日

上総國山邊郡土氣古城主酒井中務丞胤治家中石附

富田伊豆守
記置之

酒井氏一門調査記録酒井忠明



東金出本國遠州 高五千石 古川雲州 國吉出張 高千石 竹倉出張 高千石 若茶豊前 富田出張 高千石 伊豆守中書 中野出張 高千石 鈴木隼人 大綱出張 高千石 板倉長門 以上	奉行 千石 市東丹波 三千石 大木太郎左門 八百石 柴田權右門 千石 三嶋求馬	六百石 村田只八 四百石 玉井善之助 四百石 三嶋傳右門 御目附 二千石 原 軍治 千石 鈴木左近 七百石 長谷川左太夫 三千石 田村志平 千石 大野舍人 千石 北田雅樂之輔 五百石 永田兼治 千石 藤代嘉平治 百五十石 小高半太夫 百石 伊丹七良 百五十石 土屋三治 百石 龜井本二良 百五十石 船橋權九良 二百石 金坂主水	千石 井野弥八 千石 本原謙二良 者 五百石 平賀平六 二百石 今井權右門 二百石 久我内權之助 二百石 藤田主馬 四百石 服部清介 二百石 松本幸治良 五百石 川井閑太良 二百石 野々山藤吉 百五十石 川織小太郎 百五十石 星合源治 五百石 荒木七右門 七百石 加瀬太郎太 三百石 三枝安右門 三百石 吉野左近進 三百石 倉橋半藏	三百石 石原小平治 二千石 吹野和泉 中老 千石 森川玄蕃 七百石 冷水内藏輔 二千石 川口喜内 五百石 原岡淺右門 千石 山口 登 千石 田文四郎若前 千石 大野和泉 八百石 君塚主水 千石 山口修理 八百石 太田民部 六百石 武田友八 千石 浅野富太夫 二千石 関口近江 千石 小倉舍人	二千石 若菜主膳 二千石 氏清友之助 二百石 武田玄治 四百石 成瀬徳右門 千石 大谷仙右門 百五十石 片岡勘七 五百石 〇〇平藏 千石 戸村五左門 千石 鉄部軍平 醫者 千石 林田元悦 千石 〇〇小平治 千石 若林太藤治 千石 浅野源太郎 二千石 萩原又左門 五百石 久留嶋兵庫 千石 板倉伊藤太 千石 川村守去清
---	---	--	---	---	---

五百石 山邊伊織 五百石 永田傳藏 二千石 飯田河内 千石 杉浦源治 千石 本多弥惣治 三千石 林 左近 千石 渡邊右京 四百五十石 上倉勇治 三百石 石川逸八 五百石 町田三重郎 三百石 比根野升之助 八百石 早部弥惣治 千石 金沢豊吉 千石 竹内喜内 六百石 市藤左司馬 三百石 芝田長藏 九百石 安藤忠右門 七百石 田村龜之助 六百石 吉田團右門 二百石 松岡泰治 二千石 内藤澤左門 四百石 矢田新左門 二千石 吉野政吉 七百石 大橋繁右門 七百石 大木九郎治 四百石 安部四郎兵衛 八百石 川口舍人	百石 立崎左太夫 百石 勝田弥市 百五十石 片〇源八 二百石 石戸喜太良 二百石 石橋 互 二百石 田邊多市 外様方 四百石 大野修理 千石 森川兵庫 千石 福嶋新藏 三千石 原田源内 二千石 藤川藤十良 千石 藤川友之丞 二千石 千葉四左門 千石 大川三左門 千石 土川内藏人 千石 高野新平 千石 州藤只太良 五千石 泰行寺四良道 千石 八代治左門 千石 三好内郎 千石 石見太良三郎 千石 冷水源八 千石 村松甚藏 千石 松田新介 千石 細田金右門 千石 寺崎三太夫	四百石 宮田金左門 七百石 河部帶力 七百石 山本小治良 二百石 龍川太郎 百五十石 三刀屋金吉 百五十石 木戸五郎左門 三百石 和田八右門 五百石 齊藤惣左門 馬廻り 百石 深井重右門 百五十石 嶋津六良左門 三百石 豊田〇之助 千石 長田主膳 七百石 倉橋東馬 千石 戸村五郎太夫 四百石 今川嘉右門 千石 金井近右 六百石 嶋津太郎 七百石 木村戸右門 二百石 吹野權太夫 三百石 君塚三郎二良 百石 新田勝之助 八百石 山田治部右門 七百石 池田四郎左門 四百石 今村儀太夫 千石 黒川半藏 七百石 松田藤三郎	千石 齊藤備前 百五十石 河合主抗 五十石 寺嶋吉弥 二百石 小野寺清 百五十石 朝倉九郎 三百石 高橋源太良 五百石 大野甚藏 百五十石 田中市良右門 千石 古川外記 五百石 土井太良八 七百石 寺沢金弥 七百石 遠藤嘉平治 二百石 二見藤右門 百石 三枝又治郎 二百石 藤崎富重良 五百石 谷千鳥右内 千石 矢部四郎 七十石 渡邊三左門 百石 安藤民部 八十石 水野弥太郎 百石 松田左藤太 百石 森川新五良 百石 天野權平 二百石 保野甚八 五百石 中田治部 百五十石 伊藤長八	二千石 大塚色之助 五百石 寺田外記 五百石 寺沢五八 七百石 橋野左司馬 五百石 山崎友〇〇 千石 原河虎之助 七百石 深沢太良左門 八百石 小林左京 三百石 今井弥五良 三百石 陣野原宗軒 七百石 佐倉民右門 五百石 板倉平馬 千石 上原谷右門 五百石 原田政右門 千石 田原丹藏 七百石 大塚治〇〇 三百石 村中五太夫 三百石 原室之進 六百石 高村右内 四百石 〇〇田丹藏 三百五十石 吉野利平治 千石 石橋主水 四百石 戸田半藤 三百石 高橋玄〇〇田 三百石 山口三大夫 八百石 矢部左京 合計貳百九名 以上
--	--	---	---	---